

夕霧（春夜障子梅）

へ冬編笠のあかばりで 紙衣の火打膝の皿 笠吹きしのぐ忍草 しのぶ
とすれど古への 花は嵐のおとがひに 今日寒さを喰いしばる
はみ出し鏝も神さびて こじり詰まりし師走の日 へ胡散らしくも古田
屋の内をのぞいて

「喜左衛門宿にか 喜左／＼」

へと 鼻に扇の横柄なり へ喜左衛門は立出で

「オオヤおめづらしや伊左衛門様 いざお通り」

へと 袖をひけば

「ア、これ喜左 さりとては紙衣ざはり荒い／＼」

へ引けば破る、 掴めば跡にしはす浪人 昔は槍が迎いに出る 今はよ
う長刀の 草履を脱いで編笠の 中の座敷に通るける

へ奥の様子を伊左衛門 腹立まぎれ床の間の 三味線引きよせ調子さへ
合はば何うしてかうしてと胸は二上り三下り 唄のしょうがに合の手
や へ可愛い男に逢坂の 関よりつらい世のならい

「ア、誠にそれよ あの唄で思ひ出す 去年の月見に太夫と己が連
びきに 弾いた時の面白さ 弾く其ぬしは変はらねど 変つたはお
れが身の上 あいつが心底あのやうにあらうとは

へ思はぬ人に堰き留められて 今は野澤の一つ水

「ア、さうぢやナア 恋も誠も世に在る時 人の心は飛鳥川 変はる
は勤めのならいぢやもの 逢はずといつそ去んで呉れう

イヤ／＼／ 逢はずに去んでは 此胸が

へ済まぬ心の中にも暫し 澄むはゆかりの月の影

へ無慙やな夕霧は 流れの昔なつかしき 夫の音締め身にこたへ 飛び
立つ心奥の間の 首尾が朽ちせぬえんと縁胸と心の間の山間の襖の
工合よく

へ明暮恋しい夫の顔 見るに嬉しく走り寄り 抱きついたるきり／＼す
泣くより外の事ぞなき

「コリヤモウ其涙に懲りたもの エ、ここな萬歳傾城め

萬歳ならば春おぢや通りや

へ通りやといひければ

「ムウ此夕霧を萬歳とはえ」

「才才萬歳傾城の因縁知らずか アノ侍の足にかけて蹴らるゝを

萬歳傾城と云ふぞや」

へ誠にめでとうさむらいける

「しかも足駄はいて蹴るやら」

へ年立ち返るあしだにて 誠にめでたうさむらひける

「ナント聞こえたか 去りながら何も身すぎあの様なよい衆に蹴
られては損ないかぬ 慾を知らねば身が立たぬ

へ悠わかにかに御萬歳とや 年立ち返るあしだにて 誠にめでたうさむらいける

「町人も蹴る 伊左衛門も蹴る ヤ、けるくくく」
へと 蹴ちらかし 煙草引きよせ吹く煙管の さらぬ体にて居たりける
へ夕霧涙もろともに 怨みられたり嘆つのは 色のならいといいなながら
へ仲直りすりや明の鐘 憎うてならぬ鳥の声 何の鳥が意地悪で 啼く
ぢやなければどきぬく 去なせとむない心から へ去年の暮から丸一
年二年越しに音づれなく それは幾瀬の物案じ 夫故に此病い 痩せ衰
えたが目に見えぬかア、ア、前薬と煉薬と鍼と按摩でようくと 命
繋いでたまさかに 逢うてこなはんに甘ようと 思うところを逆さまな
こりやむごらしい何うぞいの 心強や胴慾な 憎やと膝に引き寄せて
さすつつ泣いっ声を上げ 訳も性根もなかりける
へ所へ喜左衛門ナ立ち出で

「申しく伊左衛門様 おまへ様の御勘当もゆりまする 里の御子
息様もおも家へお引き取り 夕霧様の身受もサラリと埒あきまし
たサアく目出度いはく」

へと 家内が勇む勢ひに 連れて浮き立つ伊左衛門 悦びの眉を開くや
扇屋夕霧 名を萬代の春の花 見る人袖をぞつらねける